

一冊で100シリーズ (20)

続・一冊で 100冊を讀む 日本の名著

編著 ■ 酒井茂之

文芸評論家

学生、OL、主婦、ビジネスマン、教師、必携 !!

- ◆これから名これこれたこれこれこれから名目録として
- ◆忙しい人も忙し忙し忙忙忙忙忙しい人もしだ気分
- ◆入学試験、入学入学入、入、入、入学試験、ほとめとして
- ◆すでに読んすですすすすすすでに読んい出の書とし

友人社刊

■編著者紹介

酒井 茂之(さかい・しげゆき)

1947年、長野県須坂市生まれ。青山学院大学文学部を卒業。通信社記者、雑誌編集者をへてライターとなる。人物論、文学論、旅、釣り、アウトドアなどに関する数多くのルポを手がける。著書に『ハロー！フィッシング―自然を楽しむためのフィッシング&フィールドノート』（成美堂出版）、『ファミリーキャンプ入門』（講談社文庫）、『釣り百科』（日本文芸社）『つくっちゃう！』（共著・平凡社）、『一冊で日本の名著100冊を読む』（共著・友人社）『一冊で愛の話題作100冊を読む』（友人社）などがある。

【一冊で100シリーズ ②】

続・一冊で日本の名著100冊を読む

1992年3月25日初版刊

編著者 酒 井 茂 之

発行者 岩 本 修 三 郎

印刷者 上 野 滋 朗

発行所 株式会社 友 人 社

東京都新宿区新宿5-18-20-506 〒160

* 検印省略

電話(3208)0788 振替(東京)4-26141

本書の無断コピーは、著作権・出版権にふれます。ご注意ください。

ISBN4-946447-23-7 C0091

文芸評論家
編著 ■ 酒井茂之

続・冊で 日本の名著 100冊を読む

友人社

序にあたって

文芸書が読まなくなった、という話を聞くようになって、もう何年ぐらいになるでしょう。しかし、本当に最近の読者は、文芸書を読まなくなったのでしょうか。いえ、必ずしもそうとは言い切れないと思います。相変わらず文学を読みたいという熱心なファンはいるはずです。ところが、それに反するかのように、明治、大正、昭和初期の作品のなかで、夏目漱石や森鷗外といった一部の人気作家の作品を除いては、多くの作品が手に入りにくくなっているのが現状です。

近代文学がスタートして百年、この間に実に多くの作家が誕生し、実に膨大な数の作品が生み出されてきました。それらの中には地味ながら、時代を越えて読み継がれてほしい名作といわれる作品は少なくありません。ところが、そういった作品は売れないという理

由で、出版社は刊行し続けることを断念し、書店の棚から消えつつあるのです。もう、古本専門の書店でしか見つけれない作品がどれだけ多いことでしょうか。

本書は本シリーズ①の『一冊で日本の名著100冊を読む』の続編として刊行されました。前書の中に収容することのできなかった一〇〇作品をピックアップしてあります。長編、短編を問わず、二ページもしくは四ページという限られた原稿枚数の中で紹介しています。しかし、文字数は限られていても、原作の雰囲気や持ち味を、極力損なわないように工夫したつもりです。したがって、原作の概要ではありますが、原作を読んだときの印象に近いものになっていると思います。

*

*

*

*

本書の中には明治、大正、昭和の初期に発表された作品で、すでに入手しにくくなっているものが多く含まれています。膨大な作品の中から、それらをピックアップするという行為は、ある意味では不遜なことかもしれませんが、少なくとも読者の皆さんがこれから

どのような作品を読んだらいいのか、と迷われたときの道標として役に立つことを願っています。

*

*

*

*

前書の『一冊で日本の名著100冊を読む』とあわせてお読み戴ければ幸いです。

なお、本書の執筆にあたって原田瑞枝、香川善昭の両氏に協力いただきました。この場をかりてお礼申し上げます。

一九九二年 春

酒井 茂之

目次

序にあたって
本書の見方

◆浮雲（二葉亭四迷）	10	◆お目出たき人（武者小路実篤）	46
◆五重塔（幸田露伴）	14	◆銀の匙（中 勘助）	48
◆にこりえ（樋口一葉）	16	◆あらくれ（徳田秋声）	52
◆忘れえぬ人々（国木田独歩）	18	◆道草（夏目漱石）	54
◆高野聖（泉 鏡花）	20	◆最後の一句（森 鷗外）	56
◆牛肉と馬鈴薯（国木田独歩）	24	◆明暗（夏目漱石）	58
◆金色夜叉（尾崎紅葉）	26	◆カインの末裔（有島武郎）	62
◆其面影（二葉亭四迷）	30	◆地獄変（芥川龍之介）	64
◆一兵卒（田山花袋）	32	◆和解（志賀直哉）	66
◆春（島崎藤村）	34	◆青木の出京（菊池 寛）	68
◆隣の嫁（伊藤左千夫）	38	◆忠直卿行状記（菊池 寛）	70
◆生（田山花袋）	40	◆雪解（永井荷風）	74
◆家（島崎藤村）	44	◆青銅の基督（長与善郎）	76

◆ 濠端の住まい (志賀直哉)	78
◆ 大阪の宿 (水上瀧太郎)	80
◆ 心理試験 (江戸川乱歩)	82
◆ 竹沢先生という人 (長与善郎)	84
◆ 檸檬 (梶井基次郎)	86
◆ 海に生くる人々 (葉山嘉樹)	88
◆ 春は馬車に乗って (横光利一)	92
◆ 冬の日 (梶井基次郎)	94
◆ 河童 (芥川龍之介)	96
◆ 波 (山本有三)	98
◆ 太陽のない街 (徳永 直)	100
◆ 函館病院 (吉川英治)	102
◆ 吉野葛 (谷崎潤一郎)	104
◆ 党生活者 (小林多喜二)	106
◆ 人生劇場〈青春編〉 (尾崎士郎)	108
◆ ジョン万次郎漂流記 (井伏鱒二)	110
◆ 幻談 (幸田露伴)	112
◆ 歌のわかれ (中野重治)	114
◆ 篠笛 (舟橋聖一)	116
◆ ふるさとびと (堀 辰雄)	118

◆ 世相 (織田作之助)	120
◆ 暗い絵 (野間 宏)	122
◆ 白痴 (坂口安吾)	124
◆ 草を刈る娘 (石坂洋次郎)	128
◆ 厭がらせの年齢 (丹羽文雄)	130
◆ 顔の中の赤い月 (野間 宏)	132
◆ 桜桃 (太宰 治)	134
◆ 虫のいろいろ (尾崎一雄)	136
◆ 人間失格 (太宰 治)	138
◆ 桜島 (梅崎春生)	140
◆ さようなら (田中英光)	142
◆ 千羽鶴 (川端康成)	144
◆ 流れる星は生きている (藤原てい)	146
◆ 菊坂 (田宮虎彦)	150
◆ 来宮心中 (大岡昇平)	152
◆ 出征 (大岡昇平)	154
◆ 遙拝隊長 (井伏鱒二)	156
◆ めし (林芙美子)	158
◆ 火の鳥 (伊藤 整)	160
◆ あすなる物語 (井上 靖)	162

◆悪い仲間（安岡章太郎）	164
◆赤ひげ診療譚（山本周五郎）	166
◆海と毒薬（遠藤周作）	168
◆点と線（松本清張）	170
◆楼蘭（井上靖）	172
◆紀ノ川（有吉佐和子）	174
◆アメリカひじき（野坂昭如）	176
◆螢の川（伊藤桂一）	178
◆午後の曳航（三島由紀夫）	180
◆出発は遂に訪れず（島尾敏雄）	182
◆私ひとりの私（石川達三）	184
◆星への旅（吉村昭）	186
◆さらばモスクワ愚連隊（五木寛之）	188
◆岸辺の祭り（開高健）	190
◆華岡青洲の妻（有吉佐和子）	192
◆我が心は石にあらず（高橋和巳）	194
◆光と影（渡辺淳一）	196

◆司令の休暇（阿部昭）	198
◆蟻の自由（古山高麗雄）	200
◆立ち盡す明日（柴田翔）	202
◆妻隠（古井由吉）	204
◆渚通り（立原正秋）	206
◆幸福（宇野千代）	208
◆いづこより（瀬戸内晴美）	210
◆いつか汽笛を鳴らして（畑山博）	212
◆コチャパンバ行き（永井龍男）	214
◆火宅（中上健次）	216
◆拳銃（三浦哲郎）	218
◆寺泊（水上勉）	220
◆暗い流れ（和田芳恵）	222
◆玉、碎ける（開高健）	224
◆幻の光（宮本輝）	226
◆遠雷（立松和平）	228
◆尋ね人の時間（新井満）	230

本書の見方

■本書は、明治初期から現代までの間に発表された作品で、長編、短編をふくめ、本シリーズ①の『一冊で日本の名著100冊を読む』に収容できなかった作品を集めたものである。

■作品の選定は次のような要素を基準とした。

- 一 国民の愛読書として、評価の高い作品。
- 一 文学史を彩り、中学校・高等学校などの教科書などに登場する作品。
- 一 その時代背景などを良く反映している作品。
- 一 文芸評論家・作家などの間で名著としての評価が高い作品。
- 一 著者にとって重要な位置を占めたと思われる作品。

■作品は発表された年代順に並べた。

■各項目は次のような順序で記述してある。

- 一 タイトル、著者名、発表年、見出し
- 一 本の概要
- 一 著者略歴および作品解説

■各作品は基本的には二ページ単位で紹介してあるが、テーマやストーリーが複雑で、かつ、より文学的価値の高いと思われる作品については四ページで紹介した。

うき
浮

くも
雲

一葉亭四迷

一八八七—一八八九年発表

* 恋人に対する青年の苦悩

役所の官員である内海文三は、ある日突然、免職を言い渡された。彼は静岡県のもで、十四歳の年に父親が亡くなってからというもの、東京にいる叔父の家に引き取られた。泣きの涙で彼が静岡を出て上京したのは明治十一年、文三が十五の時である。叔父の家にはお政という女房がいたが、彼女はとにかく如才がなく、万事に渡って抜け目がない。叔父とお政の間には、お勢という娘と勇という腕白盛りの弟がいた。お勢はやんちゃな娘に育った。

一つ屋根の下で暮らすようになってから、いつの間にか文三はお勢に好意をいだくようになった。出勤して事務を執りながらも、お勢の事を思い続けに思い、退省の時刻を待ち侘びる。帰宅してもお勢の顔を見ればよし、さもなくばがっかり力抜けがする。しかし、お勢も文三を憎からず思っているらしい。ある夜のこと文三は親しくお勢と話を交わした。お勢は「私には貴方という親友があって大変気丈夫になった」という。「それが真実なら尚嬉しいが、しかし私にや貴女と親友の交際は到底できない」と文三は言った。何故と聞くお勢に「貴女は私の事が分からないから」「さうですか。それでも私には貴方はよく分かっている積もりですよ。貴方は学識があって、品行が方正で、親に孝行で……」「だから貴女には私が分からないというのです。私は孝行ぢやありません。私には……親より……大切な者があります……」「親より大切な者……親より……者……親より大切な者は私にも有りますワ。文三はうなだれていた頸を振り上げて「エ、貴女にも有りますと」「ハア有りますワ」「誰……誰が」「人ぢやないの、アノ真理」。文三はぶるぶると身震いをする、思い切ったように言った。「私には真理より大切な者が有ります。去年の暮れからまる半年、その者のために感情を支配せられて、寝ても覚めても忘れられればこそ、死ぬより辛い思いをしていても、先ではすこしも汲んでくれない。むしろつれなくされたならば、また思い切りやうもあろうけれども……」。庭に月が出ていた。お勢の横顔を見れば目鼻口の美しさは常に変わったこともないが、月の光を受けてすこ

し蒼味を帯びた瓜実顔が美しい。

文三が某省に勤めて二年、少しは貯えもできたため年老いた母を呼び寄せ、一家をなそうと考えていた。その時にはお勢を文三と一緒にさせようと、お政は言った。しかし思いがけなく論旨免職となり、それをお政に打ち明けたところ、手のひらを返すような仕打ち。お政の冷たさに文三はこの家を出て、下宿をしようかと部屋を片づけ始めたが、出てゆくにはお勢を捨てていかななくてはならないのかと思うと、今更末練が残る。

ある日のこと「今日は」と言つて訪ねてきた者がある。本田昇という文三の同僚だったが、すこぶる愛嬌がある上に、極めて世辞がうまい。課長に取りいつたおかげで、免職とはならずすんだ。昇は下宿が目と鼻の先のせいにか、しばしば文三のところに遊びにきたが、お勢が帰宅してからは一段と足繁くなった。昇はお政に取り入り、お勢とも親しくなっていく。それを見るのが文三にとって何よりもつらいことだった。

日曜日、昇はお勢とお政を誘い団子坂に菊を見に連れ立って出かけていった。文三も誘われたがきっぱりと断った。そのとき「貴方と御一緒でなきや私もよろしう」とお勢には言つて欲しかった。お勢たち親子が出かけた後、机のそばにうずくまったまま文三は物思いに沈んだ。お勢のことが気にかかつてしようがなかった。

十一月四日、二階から下りて奥座敷を覗いてみると、昇が来ていた。しかも傲然と火鉢のそばにあぐらをかいていた。そのそばにお勢がべったりと座っている。出かけようとした文三を呼び止めた昇は、役所で今度免職になった者の中から、二、三人復職できることになったから、課長に口をきいてやってもいいと言う。文三は黙してしまつたが、顔に隠しようのない不快な表情が現れている。「嫌かね。ナニ嫌なものを無理に頼んで周旋しようと言うんぢや無いから、だがやせ我慢なら大抵にして置く方がよからうぜ」。文三は血相をかえた。「そんなことおっしゃるが無駄だよ」とお政が横合いから嘴をいれた。「うちの文さんはグツと氣位が立ち上がつておいでだから、そんな卑劣なことア出来ないッサ」「ハハアそうかね。それは至極おリッパなこつた。ヤこれはとんだ失敬を申し上げました。アハハハ」。お勢が見ている前で、文三は昇を愧死させるぐらいの一言を言いかえたかったが、文句は見つからない。文三は決然として立ち上がつて座敷を出ると、後ろの方でドツと口を揃えて高笑いする声がした。口惜しい。腹が立

つ。なにより、お勢の目の前で辱められたのが口惜しかった。

お政はお勢の身の固まるのを楽しみにしていたに違いない。それが文三の免職によってあてが外れたので失望した。以前は文三を下にも置かぬほど親愛していたのに、今では針を含んだ言葉を投げかける。氣にくわぬことがあれば、目をそばだててにらめつけることもある。(もし叔母がおふくろのように俺の心を噛み分けてくれたら、もし叔母が心を和らげて共に困厄に安んずる事が出来たら、俺ほど世に幸福な者はあるまいに)と思う。しかし、叔母の意見に従おうとすれば嫌でも昇に頼まなくてはならぬ。昇をさしおいて課長に取りいろうとすれば、あいつは必ず邪魔を入れるに違いない。「ハテどうしたものだろう」と文三は考えた末、お勢に相談してみようと二階を降りた。

文三が本田昇のことを「あんな卑屈な奴」と言うとお勢は「貴方と本田さんは氣が合わないかもしれないが、それをむやみに罵^はりして……そんな失敬なことって」と顔を赤らめ言う。これが文三とお勢とのいさかいの発端になった。「それでは何ですか、本田は貴女の氣にいったと言うんですか」と文三が尋ねると、お勢は「ハイ本田さんは私の氣にいりました……それがどうしました」。文三はぶるぶると震えた。真つ青になりながら「それじゃ……今迄のことはすっかり……水に流してしまいましたよ」「何です、今迄の事とは」「この場になってそうとぼけなくっていいじゃありませんか。いっそ別れるものなら……綺麗に……別れようぢやありませんか」「誰がとぼけています。誰が誰に別れようと言うのです」。文三はむらむらとして「とぼけるのもいいかげんになさい。今までさんざん人の感情を弄^もんでおきながら……誰が誰に別れるのだとは何の事です」と声高に言った。「何ですと。……誰が人の感情を弄^もびました……誰が人の感情を弄^もびましたよ」。お勢も目を潤ませながら叫ぶ。文三とお勢の感情はすっかり食い違ってしまった。文三はお勢に欺かれたような心地がして、わけもなく腹が立った。いよいよ下宿を探さなくてはと家を出たものの、しばらくすると早く顔が見たい、顔をみれば、どうせ良い心地がしないのは知れているけれど、それでいて早く顔が見たいという気持ちになる。

一週間たち二週間とたつ。昇は相変わらずしげしげと遊びにくる。お勢もますます親しくなる。お政はしきりにお勢に昇のところに行くのはどうかと暗示をかける。そのうちお勢は文三をはしたなく辱めはしたものの、ただ冷

淡なばかりで、それほど辛くもあたらなくなった。それにひきかえ、お政は文三を憎んで、始終出ていけがしに扱う。文三がなにか用事があって下座敷におりると、家中がより集まって雑談している時でも、皆いい合わしたように口をつぐんで顔を曇らせる。お政はなにをしているとばかり文三をねめつけ、時には苛立って聞こえよがしに舌鼓など鳴らして聞かせることもあった。今の家内をみると和らいだところもなく、落ち着いたところもなく、なげやりに見渡せば、華やかで心配ごともなく浮き浮きとして面白そうに見えるけれど、つらつら見れば私欲、貪婪、淫褻、不義、無情の固まりである。「どうしたものだろう」という問いは、日に幾度となく文三の胸に浮かんできた。が、そのうちふと嬉しく思い惑う事に出合った。というのも、お勢がにわかに昇とうとうとしくなったのである。それまでお勢の言動に一々目をつけ、自分も心を狂わしていた文三も、ここに至って道を失っていく思念の歩みをとどめた。

ある時、文三が奥座敷に行こうと二階から降りると、お勢が縁側にたたずみ、こちらに背を向けて何か一心にしていた。どうやら編み物をしているらしい。ふとこちらを向いた途端に、文三と顔を見合わせた。しかし、驚きはしても、うろたえはせず、ただにっこりしたばかりで、またあちらを向いて編み物を手にとった。そのうちに、女中のお鍋となにかを小声で話していたが、二人面白そうに打連れて出ていった。出ていくお勢の後ろ姿を見送って、文三はにっこりした。どうして様子が変わったのか、それを疑う暇はなく、ただ何となく心嬉しくなって、にっこりした。様々な取り留めないことが次々と胸に浮かんできて、それらの事の全てが文三の疑心から出た暗鬼で、実際はさして心配する程の事ではなかったかとまで思い込んだ。が、心を取り直して考えてみると、故無くして文三を辱めた事といい、母親に逆らいながらもいつかその言いなりになってしまった事といい、親しかった昇とうとうとしくなった事といい、悲しんでいいのか喜んでいいのか自分にも判然としなくなった。笑う事もできず、泣く事もできず、快と不快との間に心を迷わせながら、しばらく縁側を歩きつ戻りつしていたが、とにかく声をかけて聞いてくれたらもとの通り、もし聞いてくれなかったら、断然として叔父の家を辞し去ろうと決心を固めた。

ふたばてい・しめい 一八六四—一九〇九年、江戸市ヶ谷生まれ。東京外国語大学露語科に入学。この作品は言文一致体で書かれた、日本近代文学史を飾る最初の作品として知られている。他の作品に『あいびき』『めぐりあい』『其面影』などがある。

五重塔

幸田露伴

* 貫いた職人の意地

一八九一年発表

谷中感應寺に五重塔が建てられることになり、大工の頭領である川越の源太は、類の少ない仕事だけに、是非してみたい、請け合せてみたいと思つていた。ところがもう一人、五重塔が建つと聞くや、急にむらむらとその仕事をすゑる氣になった者がある。腕は親方の源太に保証されるほど確かだが、世才にうとく仕事も取りはぐりがち。仲間からたたき大工、穴掘り大工、のっそりといういまいまいあだなさえつけられていた。名前を十兵衛という。

いよいよ塔の建つのが決まり、源太に積もり書き出せとのいつつけを、知つてか知らずか上人様にお目通り願ひたしと、十兵衛が来たのは二月ほど前のことだ。上人様に目通りした十兵衛は、涙を浮かべて切々と己の心を打ち明ける。御上人様、五重塔は百年に一度一生に一度建つものではござりませぬ、恩を受けて居ります源太様の仕事を取りたくは思ひませぬが、ああ賢い人は羨ましい。一生一度百年一度の好い仕事を源太様はさるる、死んでも立派に名を残さるる、……それにひきかえこの十兵衛は鑿手斧のうちきずなもつては源太様にだとして誰にだとして後れを取るような事は必ずないと思ひますが、己の不運を嘆きます。御上人様、源太様は羨ましい。知恵も達者なれば腕も達者、ああ羨ましい。十兵衛の心情を聞いた上人は迷つた。川越の源太もこの仕事をことのほかに望める上、腕は彼とて鈍くはない、人の信用は遙かに十兵衛を超えている。一つの仕事に二人の番匠、いずれにせんと上人もさすがにこれには迷ひに迷つた。数日後、上人は源太と十兵衛の二人を呼び、二人で相談するようにと申しつける。相談のまとまりたる通りに取り上げてやるのおおせ。源太は家に帰るとしばらく考へていたが、やおら思ひ立つと十兵衛の家を訪れこう言つた。つくづくそなたの身を察すればいっそ仕事をくれたいような氣がするが、といつて俺も欲は捨て切れぬ。仕事は眞実どうあつてもほしい、そこで十兵衛、相談じゃが我慢して承知してくれ、五重塔は二人で建てよう、俺を主にしてそなた不足でもあらうが、副になつて力をかしてくれまいか。不足でもあらうが源太頼む。やがてたれていた首をもた

げた十兵衛は、それは嫌でございます、と無愛想にいい放った。この十兵衛に半分仕事を譲ってくださるのは慈悲のようで情け無い。塔を建てたいのはやまやまでも、十兵衛は諦めております。一つの仕事を二人でするは、どうしても出来ませぬ。親方一人でお建てなされ、私は馬鹿で終わります。

翌日、意を決して上人を訪ねた源太は、真意を面にあらわし、お上人様たとえ十兵衛一人におおせつけられますればとて、私は必ずなんとも思いますまいほどに、十兵衛なり私になりどうでもおおせつけられませ。御口づからの事なれば十兵衛も私も互いに争う心は捨てて居りますほどにと願ひ出た。こうして、数日後、塔は十兵衛に任せるとのご沙汰が下された。源太は男らしくこれを喜び、苦心さんたんして調べ上げた積もり書きを、参考になればと十兵衛に差し出せば、十兵衛これを喜ばず受け取らない。さすがの源太も人情の分からぬ奴とついに堪忍の緒がきれた。

十兵衛が五重塔の仕事に取りかかったある日のこと、感應寺の普請場を見回っているとき、畜生、のっそり、くたばれと研ぎ澄ました手斧で切りかかった者があった。源太の弟子の清吉である。清吉は十兵衛に仕事を取られたと、かねてから十兵衛を恨んでいたのだ。左の耳を切り落とされ肩に傷を負ったものの、命に別状はなく事は済んだ。

時は一月の末、十兵衛が苦心さんたんの塔も見事に完成し、足場を徐々に取り除けば、毅然とそびえる塔が現れる。いよいよ落成式の日、二十年か三十年に一度という大嵐が江戸を襲った。塔は揺れに揺れたが、つぶてを投げるがごとき風にも、塔の釘一本ゆるまず板一枚剝がれなかったことに、人々は舌を巻き、あれを作った十兵衛というは何とも偉いと評判になった。そして落成式の日、上人はわざわざ源太を呼び、十兵衛とともに塔に上られ、筆に墨をひたと、我この塔に銘じて得させむ、十兵衛も見よ源太も見よとのたまいつつ、江都の住人十兵衛これを造り川越源太これを成す、と記した。満面に笑みをたたえて振り返れば、十兵衛、源太の両人とも言葉なくただ平伏するばかり。塔はとこしなに天にそびえ、百有余年の今になるまで、話は生きて残っている。

こうだ・るはん 一八六七―一九四七年、江戸生まれ。通信省の電信修技学校を卒業。「露団々」「風流仏」などで文壇に認められ、二十四歳のときに書いたこの作品で地位を確立する。昭和二十四年第一回文化勲章を受賞。「運命」「幻談」「連環記」など多くの傑作を残した。